

ラット (LAT) はなぜ同名の社会漫画「カンポン・ボーイ (Kampung Boy)」を二度書いたか

中 谷 陽 子

- 1 ラット (LAT) はなぜ同名の社会漫画「カンポン・ボーイ (Kampung Boy)」を二度書いたか (中谷)

1. はじめに
2. 一人は今、何かを考え始めた――ラットとラットの作品
- (2)(1) ラット紹介
 - (イ) ラットが描いた二冊の「カンポン・ボーイ」
 - (ロ) 七七年本のねらい
 - (ハ) 九三年本のねらい
3. 「カンポン・ボーイ」はどのようにして生き残っていくか
ラットのこだわり
小さなカンポン

結び

1. はじめに

—人は今、何かを考え始めた—

マレーシアが誇る漫画家ラット (LAT) には、海外から “マレーシア・ラット” だけの宛名で郵便が届くと友人が語っているが、まさに現代が抱える様々な問題 (難題・課題) を見事に諷刺するラットの感性に、特に東南アジア地域から厚い年齢層のファンが熱い視線を投げかけている。

ラットの人気の秘訣は、ラットが巨大な資本や強力な国家という権力が押し進める開発に抗議したい先住民や一般の人々の声の代弁者であるからである。また時には、先進工業国 (西側) の “自分達のこととは棚にあげた” やり方に不満を持つ、マレーシアの政治家や企業人の気持をつかむからである。そしてしばしば、まだ物言わぬ幼い子どもや村々の小さな生き物、森の草木に成り代わって声をあげるからである。[海亀の憂うつ (Turtle Blues)] (“LAT’s Lot” より) という漫画がある。日本のいくつかの海岸でも繰広げられている情景であるが、海亀が苦勞して砂浜に上がり、穴を掘って大切な卵を産みはじめると、手に手にカメラ・ライト・袋を持った群衆が現れて浜を埋めるといふ話だが、海亀に同情したラットは、謝罪の気持を持つ人間を代表してさらに次の漫画をかいている—ビデオカメラを抱えた大きな海亀が何匹も大挙して病院の産室めがけて押しかけてくる。人間のお産を見ようというのである。一匹の海亀が腕を伸ばして高々と差し出したライトの光の中に、恐怖に顔を引きつらせた妊婦の顔が浮かび上がる、という図である。この漫画には、人間の愚かさや悲しみが満ちている。ラットはあからさまには攻撃的な筆は振るわない。しかし、ユーモアたっぷりの表現を持って読者の声を響かせると同時に、読者にも社会を見せる役割を

果しているのである。

今、人々は多くのことを「冷静に」考えようとし始めている。マレーシアは世界で有数の熱帯雨林のある国である。当然のことながら環境問題への関心がマレーシアの人々の間に高まり、外からも各々の利害を考えながら人々が集まってくる。生活の糧でもあった熱帯雨林の木が切られる時、先祖の代から暮らしてきた先住の人々はこの事実をどのように受けとめたらよいのだろうか。大切な木を切ることにそれは経済の論理では「合法的」なのである。

本研究は経済論議をしようというものではないし、環境問題を声高に呼びかけることにポイントを置いたものでもない。ラットの諷刺漫画に多くの愛読者が居る背景には、「人間にとって本当の豊かさとは何か」を考えようとする時代の潮流のようなエネルギーが、うまれつつあることを見逃してはならない。一般に経済学的発想で行けば「経済発展の中にこそ豊かさがあるて、仮に乏しさがあるとすれば、それは豊かさに至るまでのプロセスである」となる。そこでは人間にとっての豊かさが何であるかを、立ち止って思案するような情緒的発想は多分許されないであろう。このような時代にあってラットは、訓練された鋭い感性と個性的で躍動感のある描画力を、子どもの世界にぶつけたのである。誰もが等しく経験する「子ども時代」は、多くの説明無くして私達に共感を可能にする。また時代の陰陽両面の影響を直接に受けるのが子どもであることから、子どもの姿を通して時代を浮かび上げることができる。ラット自身にとっても自らの子ども時代は、諷刺漫画家^{カデック・ニースト}の発想の原点という意味を持った、貴重でなつかしい領分であるに違いない。

Visitor from Japan

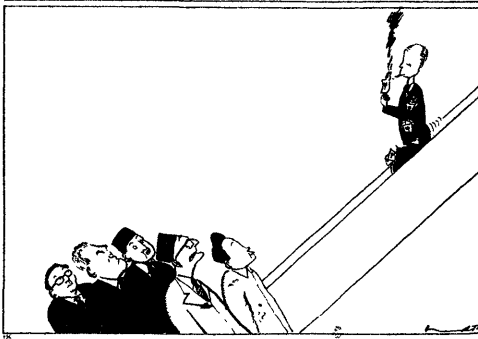


図-1

(「LAT's Lot」より)

2. ラットとラットの作品

(1) ラット紹介

ラット漫画の面白さをその漫画を見ないで語るのには、丁度果物の王様といわれるドリアン (Durian) Ⅱ 木は高さ二五m、果物は人頭大、果肉はクリーム色、味は甚だ甘く、特殊の酸味と臭気がある。マレー半島原産) を食べないで味わおうというのに

似て、ナンセンスである。図-1は一九七七年、福田赳夫首相が「対等の協力」を協調したアジア政策が示された頃、同首相がマレーシアを訪問し、日本円札をライター代りにたばこに火をつけながらタラップを降りてくる図である。カバンは勿論のこと、そこら中のポケットから日本の紙幣が溢れんばかりにのぞいている、ラットの有名な諷刺漫画である。出迎えた五人の政治家(と思われる)の目に、経済成長を遂げた景気のよい日本の首相は、すべて紙幣に見えたに違いない。とてもアジアの一員として歓迎してくれている表情ではないのである。

ラットは本名、モハ・マド・ノルビン・カリド、一九五一年生まれ。マレーシアでも特に美しいコタバルのカンボンハウス(村の小さな家)で育った。ラットはニックネームで、バラとも呼ばれた。にわとりを追いかけて、村の小川に飛び込んで遊び廻る元気な子どもであったが、ひとつだけ皆と違って、絵を描くことには才長

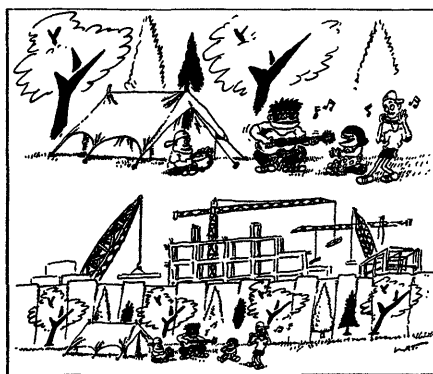


図-2 (「NEW STRAITS TIMES」より)
(1996年6月11日)

け、大好きであった。——このような才能と恵まれた自然環境の中で育ったことが、ラットを個性ある漫画家にしたと思われるが、諷刺漫画家としての素養は、父親の人を楽ませたりジョークを飛ばす豊かな才能に、また子育てに厳しくありながらも生々とした美しい女性である母親に負うところが多く、両親がラットに与えたものは測り知れないとラット自身が言っている。

ラットは文章を書いて自分の信条を綴る努力もしている。しかしやはり諷刺漫画家であって、その主張は漫画からこそ、強烈に聞こえてくるのである。ラットが最も多くのエネルギーを注ぐのは時事諷刺漫画である。例えばニュー・ストレイツ・タイムズ誌に連載しているが、新聞社の性格を意識したラットは、比較的ソフトな味の作品を発表している。筆者がマレーシアに滞在中に目にした新聞から、ラットの漫画を一つ紹介する(図-2)。

(2) ラットが描いた二冊の「カンポン・ボーイ」
Kampung Boy

カンポンは村落のことである。住民は農民の性格を強く持ち、もともとは住居周辺の森や川、海で自給自足の伝統的な経済のたて方によって暮してきた。一九世紀以後の西欧経済の侵入(植民地経営)によって、徐々に市場経済化の道をたどり始め、ラットが元気にどびまわって遊んだ子ども時代はすでに、現金経済の社会になっていたのである。しかし村の生活にはそれでもまだ日常的なマレー社会(伝統的)が残っており、ラットが自ら

の子ども時代を振り返ったときどうしても書き残したい気持ちになったものと思われる。

カンポン・ボーイは村で育ったラット自身の子ども時代をさしている。「カンポン・ボーイ」は一九七七年と一九九三年に同名の漫画本として発刊されているが、一六年の歳月をおいて出版されたそれぞれの書物に個性を与えるために、以降「七七年本」、「九三年本」と呼ぶことにする。

(イ) 七七年本のねらい

七七年本にはラットが長男として生まれ、両親や村の人々に愛され、遊び友達と豊かな自然の懷に抱かれて楽しい日々を過す様子が次々に描き進められ、節目となる六歳のコーラン塾入り、九歳の割礼の儀式、そして一一歳で中学生となりカンポンから町へとバスで走り去るところで終っている。七七年本は一九八四年に日本語訳が出版されている（「カンポンのガキ大将」晶文社）。この本は、著名な漫画家がなつかしい少年の日々を思い出して綴ったと紹介されているが、ラット自身はもっと明瞭にこの書物出版の目的を述べている——当時二六歳になったラットが育ったカンポン（村）には、子どもの頃のままの村があり、やはり子どもが遊び、森の木々にハタオリ鳥の巣がぶら下がり、川底には魚取りの仕掛けが沈められるという風であった。ラットは、美しい熱帯雨林の国マレーシアを訪れる多くの外国人観光客に、旅の車窓からながめる景色の奥に、村人や子ども達がどんなに自然豊かな生活をしているのか、遊んでいるのか、それを知って欲しいと思った——と述べている。つまり一九七七年のマレーシア、カンポンには、実に豊かな生活があったということをここで確認しておきたい。七七年本はこうした目的の為に書かれたのである。

(ロ) 九三年本のねらい

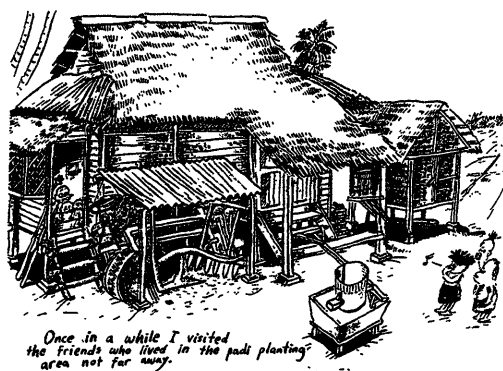
さて一六年を経て書かれた同名の書物、カンポン・ボーイ九三年本では、その表紙を一枚めくって子どもの世界を

のぞいた途端に、当然のこととは言え、厚い壁につき当たったような思いにかられたのである。はじめの四頁には、ラットが買い物をねだられてオタオタしている姿、娘達がファミコンで遊んでいる居間の光景、そしてすっかり都会化したラット家族の庭先の様子、最後におしゃれなファッションでリズムカルに舞う子どもが、持ち物の注釈入りで描かれている。四頁分だけはどれもカラー仕上げされ、「むかしむかし、とうさんが子どもだった頃には、テレビなんか無かったんだ。想像ができるかな」と文章が書き込まれている。

明らかに九三年本は、文化伝承を願って、どうしても豊かだったラットの子ども時代を現代の子ども達に書き残そうとする使命感に立って書かれているのである。どの頁にも昔の遊びの様子が克明に記されている。恐らく七七年本を書いて喜々としていたラットが、一六年目に見た今風子ども遊び風景にがく然とし、猛烈な執念を燃やして、我が身の記憶をしぼり出すように筆を進めたに違いない。それは祈りにも似て、子ども達に最高の愛情を傾けて、ひとつひとつの遊び方、遊び場の情景とその説明、遊び道具の作り方を記し、多分記憶の小さなミスも許さない位の思いで描き綴ったのではないかという気配である。さらに遊ぶ情景は、一段と生々とした躍動感にあふれ、「ほら、こんなに愉快なんだ。毎日こんなに驚いたのだ。こんな風にお手伝いをしたのだ。」という声が耳に届く気さえする。

九三年本の印象は筆者の感想ではなく、ラットの心の叫びが読む者にそう感じさせる為だと想像してみたが、どうだろうか。つまり一六年の歳月に、おだやかだったカンポンがここまで消費型生活に変わり、なお続けて変ろうとしていることを子どもたちの世界を借りて表現し、失いつつある物が何であるかをやはり子どもたちの姿を借りて警告しようとしている。そうした漫画の中からいくつかの生活の営みを取りあげてみる。

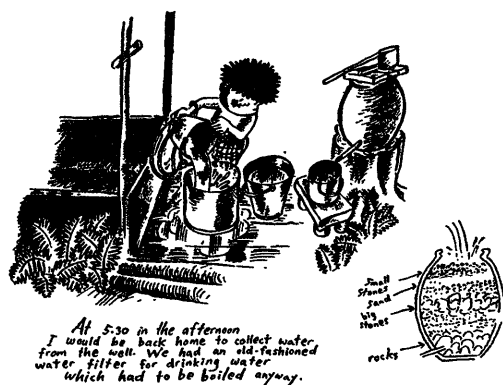
図13：マレーシアの農村は、必ずしも米作りが主体ではないが、ここでは稲作農家の友達宅へ行く。現在からみれば旧態の農機具が並んでおり、このあと皆で”手つだい”と称して手伝う。



Once in a while I visited the friends who lived in the padi planting area not far away.

図13 (『Kampung Boy』45)

図14：子ども達がよく手伝いをする。ラットの役割分担は水汲みで、ろ過の行程が詳述されている。



At 5.30 in the afternoon I would be back home to collect water from the well. We had an old-fashioned water filter for drinking water which had to be boiled anyway.

図14 (『Kampung Boy』46)

- 9 ラット (LAT) はなぜ同名の社会漫画「カンボン・ボーイ (Kampung Boy)」を二度書いたか (中谷)

図-5 (「Kampung Boy」45)

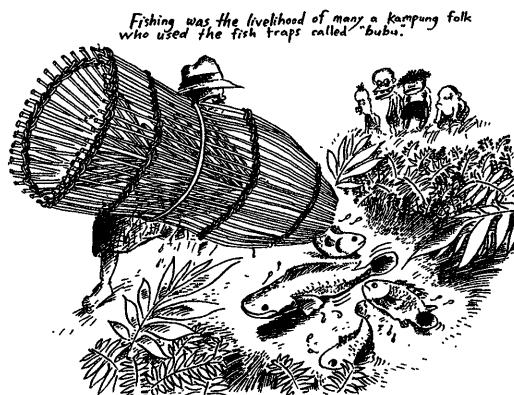


図-5：自給自足生活においては、魚採りは農民の生活技術の一つ。子どもの遊び場の一隅で魚具を作る人の光景をよく見る。網ではなく、川底に沈めたかごから大きな魚が出てくる光景は得がたいものである。

図-6 (「Kampung Boy」46)

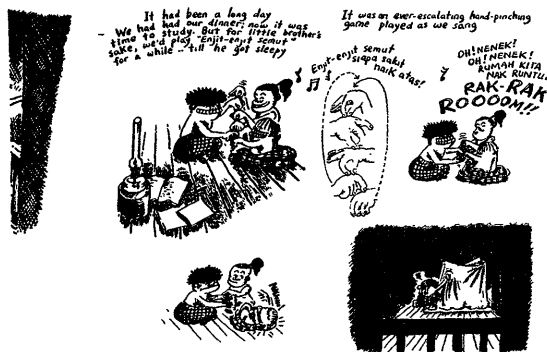


図-6：カンボンの家族の仲のよい団結を物語るものである。年下の弟をあやして遊ばせ、夜の眠りにつくまでの心楽しいひとときがのぞける。数々の遊び方説明図を見ていると、アジア全域には何と共通のものが多くが再認識される。

(ハ) ラットが同名の漫画を二度書いたこと

そもそも人間の文化の中には、書き記して紹介したり残したりすることの非常にむずかしい分野が存在する。「遊び」はまさにそれである。伝承され、伝播し、流行し、誕生し、あるいは消滅する。その繰返しによって遊びは脈々と継承されてきたのである。恐らく人類が何か単純な道具を使うようになった頃から、人間には遊ぶという快行動が始まったと考えられる。特に子どもの行動はその多くを遊びという範疇でとらえた結果、子どもといえば一日中遊んでいる存在で、学習も習得も習熟もほとんどは「遊び」から出発し、あるいは影の部分と見なされる癒し、回復、治療なども「遊び」がソフトに活躍するところである。しかしこれ程人間の精神的・肉体的に大きな領域を占める遊びを、あらゆる方法をもってしても記録にとどめることがむずかしいのは、遊び手の心の中の感性和響こうし合った時に遊びが息づくからである。ちょうど水中で美しい姿を見せる水草を、空中に取り出して写真に撮ろうとするが如きと考えればよい。

ではラットはなぜ遊びを描きながら、このように人の心を捕えることができたのであろうか。ラットの才能と云ってしまえばそれまでであるが、ラットが焦点を当てていたものは、「遊び」ではなかったのである。この解答が得られれば、ラットの漫画を山積みするほど読んでみればよい。

ラットが最も訴えたかったテーマは、「カンポン」そのものであった。カンポン・ボーイはカンポン(村、村の生活、村の歴史など)を浮き彫りにする役を演じた主役であり、沢山の生々とした遊びや遊び道具は、これもやはりカンポンをよりよく理解してもらう為の大切な小道具であった。主役のカンポン・ボーイの性格を確実にする為に、ラットは自分がカンポン・ボーイになり、ラット自身の思うところを全部語り尽せたことで大きな幸せを手にしたと想像でき

る。多くの読者がラットのかいた諷刺漫画に魅せられたとするならば、それはそのひとりひとりが「カンポン」を失いたくない、ずっと大切にしたいと願っていたからで、漫画を読むことで自分の願望が達成されたと感じたからである。

「カンポン」、それを簡単に「村落^{ムラ}」と訳したが、そこには自然と一体化して生きてきた先住民の生活が重なり合っている。西側西欧支配の歴史は、先住民の生活を非常に困難なものにしたのである。マレー半島のジャングルは破壊され、ゴムやオイルパームのプランテーションが延々と続く土地に変身してしまい、インドからはタミル人がその労役の為に送り込まれた。また錫の生産もマレー人の手から支配者に吸収され、鉱山の労働のために中国人が連れてこられた。歴史は植民地支配によって、自然体系の破壊、多人種複合社会の形成というように困難なものへと変えられてきたのである。しかしその中において人々が発展を目ざして共存の努力を積みあげてきたことが、今日のマレーシアを形づくっているのである。「カンポン」はそれで生き残ってきたのである。それはラットが外国からやってきた観光客に、窓から見る景色の奥に自分達の先住民から続く生活があることを知らせたかったというところで読みとれるのである。一九七七年本の誕生の背景である。

しかし事態は急速に変化し、ラットの努力はもう観光客の為ではなく、都市に移り住んだ人々のためであり、さらには「カンポン」そのものが都市化していくことに向けられるようになったのである。それが一九九三年本誕生の背景である。

3. 「カンポン・ボーイ」はどのようにして生き残っていくか

(1) ラットのこだわり



図-7

(「The Kampung Boy」より)

ラットが書いた七七年本は、一一歳で町の中学校寄宿舎に入るまでの幼い時代の深い思い出の結集である。多感なラットの感性を育てたカンポンの生活に対して、大人になってからラットはいくつかのこだわりを持っている。

ラットとゴム樹の最初の出会いは、近所の女性カティジャが毎朝集めるラテックスを庭先でプレスゴムにして行く過程を、毎日見たことである。ラット四歳の「不思議との出会い」である。しかしその後四、五年も経たある日、ラットは父ノラジアンに連れられて父親のゴム園に行った。父親はまだ物事の十分な判断力を持たないラットにむかって「お前はこのゴム園を長男として管理するのだ」と言った(図-7)。父親から息子へと受け継がれる責任と信頼、それを象徴する2エーカーのゴム園という財産。こうした家族内儀式にも似た感動的体験が、ラットを子どもから少年へと変身させたのである。事実ラットはこれを機に中学受験へと勉強を始める。ラットの漫画にはゴム樹がよく登場する。ゴムのプランテーションの真

中に生活していれば、背景にはタッピング (カギ型のナイフで幹に薄く傷をつけることで、そこからラテックスが流れ出るのを受ける) したゴム樹がいつも描かれるし、またゴムの木の実も遊び具として子どもに好まれる。ラットはその後もゴムの実に心ひかれ、ある時恋にやぶれる場面が描かれるが、やたらに頭上で硬い実がパチッ、パチッと爆ぜるのである。その上ラットの頭を直撃した実も描かれていて、何とも切ない雰囲気漂わせている。

ラットのこだわりはゴムばかりではない。豊かな実りをもたらす気候や熱帯赤道下の強い陽ざしを光源・熱源として使おうとする思い、また従来のプランテーションに新技術を導入して品種改良を行なった場合の生産など、すでに実用化の段階に入ったものもあると思われるが、ラットのこのようなこだわりの発想はすべて、幼い頃から遊んだカンポンの自然がラットに教えるものである。

現在のマレーシアを歩くと、ゴムの木を切り倒して次にアブラヤシを植え、そしてさらにそのアブラヤシも切り倒し土地をひらいてゴルフ場を作ったり、新興住宅地を設けたりする。次は一体どうなるのだろうか。「以前このあたりは森だった」となげく人の表情には、豊かな熱帯雨林の広がる風景を追い求めてあきらめ切れない様子を伺い知ることが多い。熱帯雨林は樹木に変化があって、近くに同じ樹種がない程だと聞く。プランテーションが進み、一方で石油化学工業の発達が目ざましい現代という時代に、熱帯雨林で生活した先住民の暮らしにもどることはできない。しかしラットの書きあらわした諷刺漫画を読むにつれ、ひとつの結論に近づいたように思われる。それは先住民の生活を再開しようというのではなく、先住民の生き方を認めることが私達には出来るだろうかということが、今後の課題になってくるのである。

ラットの「カンポン・ボーイ」には、先住の人々が大地に問いかけるようにして共存した生活を営んできた様子が、

ひとりの子どもの生きざまの中に投影されているのである。ラットの諷刺に感心し、笑うのは勿論よいが、さらに一歩踏み出して、私たちもラットのこだわりに共感していきたいと願わずにはいられない。

(2) 小さなカンポン

ラットの漫画のひとつに、樹から落ちてきた大きなやしの葉に子どもを乗せて、引きまわしながら走る様子が描かれているものがある。ラットが幼い自分のきょうだいを遊ばせている風景である。多分馬車に乗った気分で弟や妹は歓声をあげたことだろう。しかしもうひとつ興味深い描写がある——大人になり親になったラットが、さわがしい町の一角にポツンと残ったヤシの木の根もとで、今まさに落ちてきたヤシの葉を指さして幼い息子に「引いてあげるから乗れよ」と言っている。息子はぎこちなくその大きな葉の上に乗って坐ると、ラットが勢いをつけて木のまわりを引っぱって廻る図が描かれている。ラットは「息子はヒステリックな声をたてて笑った」と書いている。もうそこには昔のカンポンはないが、しかしカンポンにこだわりを持った人間が都会で小さなカンポンを作ったと解釈してはいけないだろうか。

結び

マレーシアは著しい経済発展のさ中にあり、東南アジアのリーダーになろうとしている国である。かつて日本と戦ったことのある国だと知らない世代が増え、そしてまた市民の素顔が日本には余り知られていない近隣の国でもある。

ラットの「カンポン・ボーイ」は日本語に訳されて、「心温まる傑作絵本」となって登場した。絵本だから当然のことながら子どもむけの書棚に並んでいて、大人が手に取ることは少ないのである。

ラットの本意を身近かに感ずるためにも、この二冊の同名の「カンポン・ボーイ」を続けて読んで欲しいと思う。

参考文献

- ・ 「マレーシアの社会と文化」ザイナル・クリン編 鈴木佑司訳 勁草書房 一九八一
- ・ 「海道の社会史」—東南アジア多島海の人びと— 鶴見良行 朝日選書 三三〇 一九八七
- ・ 「漫画で読む東南アジア」村井吉敬編 ちくまライブラリー八三 筑摩書房 一九九二
- ・ 「カンポンのガキ大将」ラット作 萩島末吉訳 晶文社 一九八四
- ・ 「いばらの道」シャーノン・アハマット著 小野沢純訳 勁草書房 一九八一
- ・ The Kampung Boy—1977 by Berita Publishing Sdn.Bhd.,Kuala Lumpur
- ・ LAT's Lot—1977 (同上)
- ・ Lot's of LAT—1977 (同上)
- ・ LAT As Usual—1990 (同上)
- ・ Kampung Boy—1993 (同上)
- ・ LAT 30years later—1994 by Kampung Boy Sdn. Bhd.

- LAT was Here—1995 Berita Publishing Sdn. Bhd.

(本学法学部教授)